青梅市文化財ニュース

第３２８号

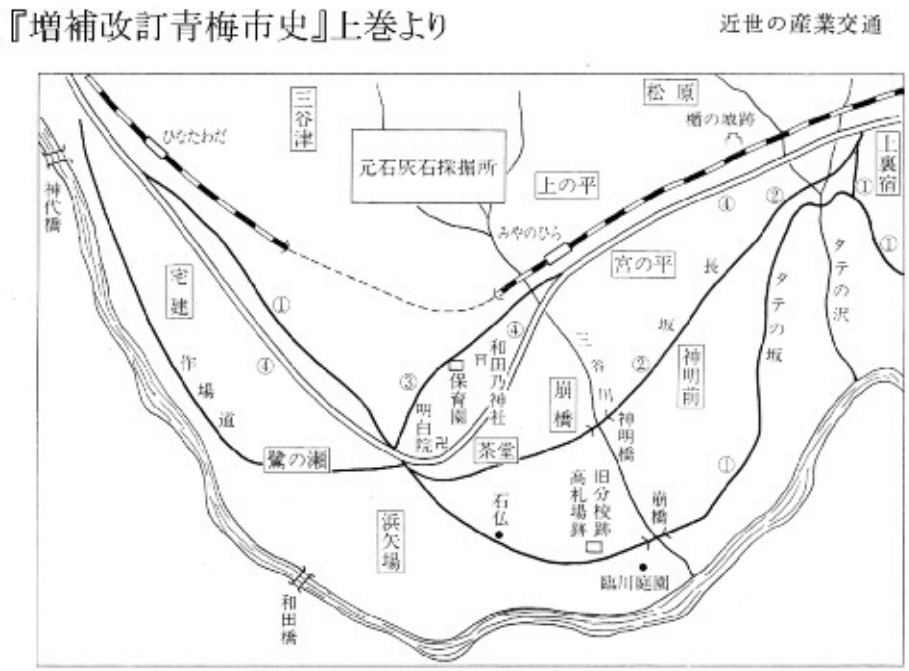
平成２７年２月１５日

発行　青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土博物館（青梅市駒木町 1-684　℡0428-23-6859）

寛保二年の大洪水とお地蔵さま

JR 宮ノ平駅南側の段丘崖を横断する古道脇に、お地蔵さまが佇(たたず)んでいます。その古道は多摩川に近い低位置を通り、中世からの街道とされています（図中①）。すぐ上部には、明治 36 年にできた街道があり（図中②）、さらに上部には、長年障害となっていた JR 宮ノ平駅西を流れる三谷(みやつ)沢を暗渠にして、昭和 8 年に完成した現青梅街道が通っています（図中④）。



図版 83　日向和田地域の青梅街道の変遷

青梅街道の明白院西にある信号から②を東に 100m ほど行くと、右手に未舗装の細い階段があり、そこから①の古道は始まります。市営臨川庭園の脇に通じていますが、人通りが絶えて久しい様子で、竹林が生い茂り人馬が通れるだけの狭い道です。左手に明白院への急勾配の参道を見て、緩やかに下っていくと、多摩川へ流下する細い沢を渡ります。この沢の手前左側土手に、二体の小さなお地蔵様が、ひっそりと佇んでいます（図中の石仏）。行き交う人々の道中の安全を見守り続けてきたのでしょうか。一体は風化が進んではいますが完形を保ち、銘がかすかに「寛保」と判読できます。もう一体は上半部が折れて失われていますが、錫杖のようなものが見えるので、お地蔵様であろうと推察されます。

このお地蔵様について資料を探すと、「一体は寛保二年と読める、もう一体は寛保年代の石地蔵尊」と記されています。寛保二年は西暦 1742 年で、寛保年代は 1741～1743 年ですので、江戸時代中期に

立てられたお地蔵様です。

寛保２年といえば、江戸時代最大規模の洪水が発生し、関東地方は大惨事に見舞われた年です。大型台風が７月末に畿内を襲って鴨川・淀川が氾濫し、８月に入ると関東地方を直撃したため、利根川・荒川・多摩川流域はことごとく大洪水となり、水没・流出家屋が続出しました。信州でも千曲川が氾濫し、さらに被害は大きくなりました。水死者は２万人超ともいい、寛保２年戌(いぬ)年におこった大水害は「戌(いぬ)の満水」といわれ、後世まで語り継がれました。

青梅でも、この台風による洪水被害が記録されています。

〇旧二俣尾村の名主・谷合七兵衛の日記『谷合氏見聞録』には、

「寛保二　壬戌年　八月一日　大雨洪水ニ而同夜村々所々大荒、前代未聞ノ荒、此ニ記ス」とあり、次々と身近に起こった災害が記述されています。（以下は意訳・抜粋）「海禅寺では、裏の岩山が崩れ懸り、庫裏(くり)の柱５、６本が折れて西へ1mほど押し出された。筆者宅では背後の畑から漏出した水がおよそ10m幅で流れ込み、床上90cmの土砂が取り残され、畳・敷物・小道具は押し流された。近所の９軒の家々は、山崩れで全壊・半壊し、屋敷の中を満水が流れて畑ともども流失し、川原になってしまい、１人は流死した。田畑・屋敷・山林・竹木・樹木を損ない、川は欠け、橋は落ち、山は崩れ、村中の人馬通い道もいつ通れるようになるか分からず、この水害でお米も麦も値上がりした。」と記しています。

〇御嶽権現神主・浅羽蔵人は、寛保２年10月の寺社奉行届書に、

「８月の大風雨で、滝本村は山河が崩れ押し出され、参詣道のみでなく山林・畑までも流されて、百姓屋敷も３軒押し流された。」と記しています。

〇旧日影和田村の『貫番覚之帳』（「つらぬきばんおぼえのちょう」と読むのであろう）に、

「洪水で川が約３ｍも増水し、家屋敷が流され、大柳の孫右衛門の屋敷は川原になってしまった。」と記されています。

これらの記録から、「寛保二年」、「寛保年間」の銘が刻まれた二体のお地蔵様は、この辺りでおこった寛保２年８月の水害被害に遭った人々の供養のために、立てられたのかもしれません。

現在、郷土博物館で企画展「江戸時代の天変地異と青梅」が、3月22日(日)まで開催中で、「寛保二年の大洪水」についての展示もありますので、是非ご覧になって下さい。

（文責　三好ゆき江）